

～ 東京近郊の小中学生 400 人に聞く～
親から継ぐ『食』、育てる『食』

はしを正しく使えることと食習慣の成熟度に相関関係あり

子どもの食習慣

料理や食べ物、食べ方についての知識は圧倒的に両親の影響が大
食べ物を大切にする教えは健在。食事を残す子どもは半数近くいるものの、
残すことに対して「作ってくれた人に悪い」と感じる子どもは大多数
食事の携帯電話やメールなどが、新たなマナー問題として浮上
はしを正しく使う子どもは、基本的な食習慣・マナーを正しく身に付けており
食育との強い相関関係が見られた

「はしを正しく持っている」と自己評価している子どもは約 6 割

学校で、米や野菜を育てた経験がある子どもは多数

ただしテーブルマナーなどを学んだ経験は意外に認識されていない

子どもの食事情

ほとんどの子どもが「毎日」家で朝ごはん、8割以上が「毎日」家で夕ごはん

ただし、朝も晩も一人で食べる子どもが 1 割

中学 3 年生では半数が一人で夕ごはん

食事のときは、8割が家族と会話、夕ごはんは家族団らんタイムとして有効

おかずとご飯を交互に食べるのは 3 人に 2 人、「ばっかり食べ」も少なくない

子どもの食事嗜好

「給食好き」の子どもが過半数、「嫌い」はごく少数派

給食のメニューランキング 1 位「カレーライス」、2 位「ラーメン」、3 位「揚げパン」

好きな夕飯のおかずは 1 位「ハンバーグ」、2 位「カレーライス」、3 位「ギョウザ」

2005年2月
農林中央金庫

はじめに

近年、食に関するニュースが多く取り上げられることもあり、食の安全・安心への関心がこれまで以上に高まっています。一方で、核家族化や少子化の進行、塾や習い事などによる子どもの多忙化、コンピュータやゲーム機、携帯電話やメールなど“個（パーソナル）”の時間の増加など、子どもの食を取り巻く環境も様変わりしています。昨年度実施した母親を対象としたアンケート調査でも、インスタント食品や総菜等の利用がますます増え、食材の知識や調理技術の世代間における伝達が十分行われなくなった、といった結果が顕著に見られました。“個（パーソナル）の時代”の進行は親や教師などの食に対する知識や関心を多様化させる傾向にありますが、そうした環境下で無垢な子どもたちが、食に対する基本知識やマナーを学ぶ機会を失う懸念も指摘されています。

このたび農林中央金庫では、昨年、母親を対象に行った『世代をつなぐ食』に関する調査結果をふまえ、食育などを通してどのように世代間の継承がなされているかを探ることを目的に、首都圏に居住する子どもを対象として、食をとりまく状況についての「親から継ぐ『食』、育てる『食』」と題した聞き取り調査を実施しました(調査対象:首都20km～50kmのドーナツ圏に居住する、小学校4年生～中学校3年生の男女400名、調査期間:2004年11月25日～12月6日)。

調査結果からは、現代の生活環境が子どもの食育に少なからず影響を与えている実態が垣間見えてきました。小学校低学年では、大多数の子どもにとって食事時は家族の団らんタイムとなっているものの、小学校高学年から中学生にかけて年齢と共に多くの子どもが「塾や習い事で忙しい」という理由で、家族で食事をとる機会が激減し、「ひとりで」食事をとる傾向が強まっています。それは同時に両親の「食」への参加度が低くなる状況を作り、子どもの食べ方やはしの使い方など食習慣やマナーの習得にも少なからず影響している傾向がうかがえます。総じて「食事中にコミュニケーションがある」ことは、「はしを正しく持つ」「ごはんとおかずを交互に食べる」「食事を残すことはもったいない」などの食習慣やマナーと強い相関を有していることが、調査結果から明らかになっています。

やはり、家庭における親の食への関わり方や、学校生活における食育のあり方が、子どもたちの食に関する意識や関心の強さに大きく影響していることは間違いないようです。

以下は調査内容のダイジェストです。

ダイジェストでご紹介できなかった調査項目を含め、詳細は別添の調査報告書をご参照下さい。

食生活の実態

1.一週間に、家で「朝ごはん」を食べる回数は？ 誰と食べる？

ほとんどの子どもは 毎日「家で朝ごはん」を食べている

～ 高学年になるほど家で「毎日」食べる子どもは減少～

「きょうだい」や「母親」と食べる子どもがほぼ半数、

ただし、「ひとりで」食べる子どもも4人に1人

～ 最も多いのは「きょうだい」(56.0%)、「母親」(49.7%)、「父親」(25.6%)は少数～

1週間に、家で「朝ごはん」を食べる回数は、「毎日」(83.8%)が圧倒的に多く、平均は「6.6回/週」という結果が出ています。しかし《小学生》(89.5%)に比べると毎日食べる《中学生》(78.0%)は少なく、年齢とともに、朝ごはんを食べなくなるようです。朝ごはんを食べない日がある理由は、「起きるのがおそいから」が7割以上と最も多く、次いで「食欲がないから」となっています。

朝ごはんを一緒に食べるのが最も多いのは「きょうだい」(56.0%)、「母親」(49.7%)との結果が得られ、共に半数前後となっています。「父親」(25.6%)は少なく、「ひとりで」(25.1%)食べることが多いという子どもも4人に1人みられました。学校別では、《小学生》の方が家族と一緒に食べることが多く、《中学生》は「ひとりで」(36.2%)食べる率が《小学生》(14.1%)より高くなっており朝の食事環境は年齢が上がるるとともに悪化していると言えます。

朝ごはんをひとりで食べるが多い理由は、「家を出るのが家族より早いから」(53.0%)が半分強で最も多く、家族が朝の時間を別々に過ごしている家庭が多いようです。さらに《中学生》になると「家を出るのが家族より早いから」(59.7%)という理由に集中しています。

【前回調査との比較】

ちなみに、前回(2003年11月)、子どものいる主婦400人に「家庭で、家族全員が揃って朝ごはんをとる回数」をたずねた時は、「ほとんどない」が3割強(31.5%)で最も多く、平均「2.2回/週」となっていました。

2.朝ごはんは何を食べる？

朝ごはんは、「パン」食が76.6%と、「ごはん」(63.1%)を上回り多数派

～ 同居家族が多いほど「ごはん」を食べる率が高い傾向～

ふだん朝ごはんに食べているのは、「パン」(76.6%)が4分の3以上と多く、「ごはん」(63.1%)を上回っています。また、同居家族人数別に見ると、《2～3人》(51.7%)、《4人》(63.3%)、《5人以上》(68.3%)と、同居している人数が増えるほど、朝ごはん「ごはん」を食べる率が高くなっていきます。

3.一週間に、家で「夕ごはん」を食べる回数は？ 誰と食べる？

8割以上の子どもは「毎日」家で夕ごはんを食べる

～家で食べない理由は「塾や習い事があるから」(85.2%)が圧倒的多数～

朝ごはんに比べると夕ごはんのほうが家族と一緒に食べる人が多い

～中学3年生になると「ひとりで」食べる子どもは半数以上を占める～

全体の1割が朝も夕も「ひとりで」食べている

1週間に家で「夕ごはん」を食べる回数は、「毎日」(84.8%)が8割以上で圧倒的に多く、平均は「6.7回/週」という結果になりました。これは「朝ごはん」を家で食べる頻度とほぼ同です。「朝ごはん」と同様に、「毎日」家で夕ごはんを食べる割合は《小学生》(91.5%)では9割を超えているのに対し、《中学生》(78.0%)では8割を切っています。夕ごはんを家で食べない理由は、「塾や習い事があるから」(85.2%)が8割以上と圧倒的に多く、小中学生の「多忙さ」が食習慣にも影響を及ぼしていることがうかがえます。

夕ごはんと一緒に食べる人が多い人として、ほとんどの子どもが「母親」(94.3%)をあげています。以下、「きょうだい」(75.3%)、「父親」(51.8%)と続き、朝ごはんに比べると夕ごはんの方が家族と一緒に食べる人が多いようです。しかし、「ひとりで」(19.8%)食べる人が多いと答えた子どもも決して少なくなく、《中学生》になると「ひとりで」(30.0%)食べる子どもは《小学生》(9.5%)の3倍以上になります。さらに、《中学3年生》になると実に半数近く(45.5%)が「ひとりで」食べています。

夕ごはんをひとりで食べる理由でも、「塾や習い事に行くから」(94.9%)が圧倒的多数でした。また、夕ごはんをひとりで食べる時の気持ちについては、「何とも思わない」が4割(40.5%)と多数派ではあるものの、やはり「つまらない」(24.1%)、「さびしい」(12.7%)などの意見も見られました。

なお、朝夕ともに「ひとりで」食べる人が多いと答えた子どもは全体の10.5%いました。こうした子どもたちは、一般的に成熟した日本人の食習慣と思われる「はしを正しく持っている」「おかずとご飯を交互に食べる」などの項目で、他の誰かと食事をしている子どもよりも低い数値を示す傾向が見られました。こうした傾向は食習慣や食事マナーに関連する調査結果全般に共通しており、食育において「家族団らんの食事の果たす役割は決して小さくない」ことを窺わせます。

【前回調査との比較】

前回、子どものいる主婦400人に「家庭で、家族全員が揃って夕ごはんをとる回数」を聞いた時の結果をみると、「2～3回」(37.5%)が最も多く、平均「3.3回/週」でした。

4.夕ごはんでは好きな料理・おかずは何？

1位 ハンバーグ、2位 カレーライス」と「定番」が揺るがぬ人気

～肉料理や油物が人気、'ギョウザ'「カレーライス」は親子共通の定番メニュー～

「おふくろの味」は健在であるものの、洋食志向は鮮明に

～好きな料理は、やはり「母親」が作ったもの～

自分の家の夕ごはんでは、好きな料理・おかず（自由回答）は、「ハンバーグ」（50件）がトップ、次いで「カレーライス」（47件）など、一般に子どもが好きだと考えられているメニューが順当に上位を占めました。以下、「ギョウザ」（18件）、「スパゲッティ」（16件）、「鶏の唐揚げ」（15件）、「シチュー」（14件）、「焼き肉」（13件）、「コロッケ」（11件）、「ステーキ」（11件）など、肉料理や油を使った料理が続き、全体に洋食の人気が高い傾向にあります。

家の夕ごはんでは好きな料理やおかずは、やはり「母親」（91.3%）が作った、という回答が圧倒的に多く、今でも「おふくろの味」は健在だと言えます。

【前回調査との比較】

前回『我が家の味』といえばどんな料理か』に対する回答としてあがったのは、「野菜の煮物」（43件）、「ギョウザ」（42件）、「肉じゃが」（34件）、「カレーライス」（30件）で、「ギョウザ」、「カレーライス」が親子共通の定番メニューであることがわかります。

食事の時の行動・習慣

1.家で食事の時にしていることは？ 家族と何を話す？

8割以上が、食事は「家族団らん」の時間として過ごす

～ 家族と話をする」(80.3%)、テレビを見る」(62.5%)がほとんど～

家族との食事中の話題は、「学校生活」や「テレビの内容」が上位

～ 小学生は学校生活、中学生はクラブ活動と社会の出来事の話題が増える～

家庭で食事をしている時には、8割以上の子どもが「家族と話をする」(80.3%)と答えており、それ以外も「テレビを見る」(62.5%)がほとんどであることから、食事の時間は「個人の時間」というより「家族団らん」の時間となっている実態が窺えます。ただし、「だまって食べているだけ」(10.8%)と回答した子どもも1割を超えていました。

食事中の家族との話題は「学校で起きたできごと」(74.5%)が最も多く、次いで「テレビ番組やタレントのこと」(45.3%)、「友だちのこと」(40.3%)など、やはり「学校生活やテレビの内容」が話題の中心のようです。また、「小学生」は「学校で起きたできごと」(80.5%)や「友だちのこと」(44.0%)など学校生活に関する話題が中心ですが、「中学生」になると「ニュース」(41.5%)、「クラブ活動」(23.5%)など社会への関心が強まり、日常生活における興味の対象の変化が表われています。

2.おかずとご飯は交互に食べる？

おかずとご飯を交互に食べるのは3人に2人

～ 「ぱっかり食べ」は全体の約2割、中学生のほうが「ぱっかり食べ」は少ない～

ごはんとおかずの食べ方については、3人に2人が「おかずとご飯を交互に食べる」(66.3%)と多数派ではあるものの、「おかずを種類ずつ食べる」(19.8%)、「おかずだけ先に食べる」(16.8%)といった「ぱっかり食べ」も少なくありません。

この「ぱっかり食べ」は現代人の特徴ではないかと一部で注目されていますが、「小学生」は「おかずだけ先に食べる」(22.0%)が「中学生」(11.5%)より高率で、「おかずとご飯を交互に食べる」という食べ方も「小学生」(59.5%)より「中学生」(73.0%)の方が高率となっており、年齢を重ねて、社会経験を積むにつれて成熟していく傾向が見られます。

3.食事を残すことがある？ 残してしまったらどう思う？

食事は残さない」子どもが半数

残すと作ってくれた人に悪い」と罪悪感を持つ子どもは4割以上

～食べ物や作ってくれた人への畏敬の気持ちは現代の子どもたちにも十分に浸透している～

食事を残すことがあるかを聞いたところ、半数強の子どもが**残すことはない** (61.8%)と答えています。《女子》では**残すことがある** (いつも+時々) (55.5%)子どもが半分を超え、《男子》では**残すことはない** (59.0%)という人の方が多く、また学校別にみても、《中学生》は**残すことはない** (55.0%)が《小学生》(48.5%)より高いことから、**残す残さないは食事量の多寡が主因**と考えられます。

食事を残すことについては、**作ってくれた人に悪い** (44.3%)が4割以上を占めています。次いで**もったいない** (37.8%)が続き、**残すことに罪悪感をもつ子どもが少なくありません**。

一方、**食べきれない時は仕方がない** (34.3%)、**嫌いなものは仕方がない** (20.3%)など“仕方がない”と思っている子どもも少なくありませんが、これに関しては**食べきれない時は仕方がない** (男子 25.5%、女子 43.0%)など男女差が見られます。これも**食べる量の違いが主因**と考えられますが、女子では**ダイエットなどの意識も少なからず影響している**でしょう。

食事を残すことと食に対する意識の関連でも、**作ってくれた人に悪い** (食事を残すことがある 27.5%、食事を残すことがない 59.9%)、**もったいない** (同 28.5%、46.4%)という意識が強く、**食事を残さない子どものほうが食事マナーなども良好な傾向が見られました**。いずれにしても、**残さずに食べる**、**残すと作ってくれた人に悪い**などの気持ちは多くの子どもが持っており、**食べ物や作ってくれた人に対する感謝や畏敬の念は失われてはいない**ようです。

【前回調査との比較】

前回、子どものいる主婦 400 人に「食品を捨てることについて、どう感じるか」を聞いた時も「もったいない」(90.3%)という回答が非常に多く、そのほかにも「もっと計画的に購入したい」「作った人に申し訳ない」など、**食べ物を無駄にすることへ罪悪感が強く**うかがえました。概ねではありますが、その親の考え方は、子どもにも伝わっているようです。

食との関わり方

1.料理や食べ物、食べ方について、誰から(どんな方法)で学んできた？

両親の影響は圧倒的に大きい

～ 先生」テレビ番組」学校の栄養士」などは低率～

料理や食べ物、食べ方について、主に誰から、あるいはどんな方法で学んできたかをきくと、最も多いのは「母親」(90.0%)で、9割の子どもがあげています。次いで「父親」(51.5%)も多くやはり両親の影響は大きいようです。以下、先生」(14.3%)、テレビ番組」(13.3%)などが続きますが、「母親」「父親」よりかなりパーセンテージは低く、食育については学校の先生よりも両親の影響が大きいことが窺えます。また、「中学生」になると先生」(16.5%)あるいは「テレビ番組」(16.0%)、雑誌」(5.5%)など親以外から学ぶことも多くなっています。

【前回調査との比較】

前回、子どものいる主婦 400 人にたずねた時も「母親」(75.0%)が最も高く、親の世代でもやはり自分の母親からの影響が大きいようです。

2.「食の安全」ということに関心はある？

食の安全に関心がある子どもは半数以上

～ 「食の安全」への関心は男子より女子、小学生より中学生のほうが高い～

ニュースで大きく取り上げられた話題や日常的に食べる物に高い関心

～ 1 位 鳥インフルエンザ」2 位 BSE(狂牛病)」が半数以上～

最近話題にのぼることが多い「食の安全」には半数以上の子どもが「関心がある」(51.5%)と答え、「関心がない」(38.3%)を上回りました。性別で見ると、「関心がある」割合は、「女子」(61.0%)の方が「男子」(42.0%)よりもかなり高くなっています。また、「中学生」になると、「関心がある」(60.5%)という子どもの方が「関心がない」(35.5%)という子どもを大きく上回りました。

「関心がある」ものとして、「鳥インフルエンザ」(57.3%)、「BSE(狂牛病)」(54.9%)の2つを半数以上があげています。やはりテレビのニュースなどでもよく取り上げられたこと、日常的に食べている身近な食材であることなどから、関心が高かったものと思われます。

【前回調査との比較】

前回、子どものいる主婦 400 人に聞いた結果をみると、「関心がある」(88.8%)の人が9割近くおり子どもに比べるとやはり親の方が関心度は圧倒的に強いことがわかります。

3.家で食べ物や食事について守るように言われていることは？

食べ物を大切にすることは健在
食事中の電話やメールなど新たなマナーの問題も
同居家族人数が多いと、注意される機会も多い

～きょうだいへの注意も自分への注意として受け取っている～

家で、食べ物や食事について守るように言われていることでは、「食べ物を粗末にしない」(58.3%)が約6割と最も多く、食べ物が豊富な現在でも、食べ物を大事にするという教えは失われていないようです。以下、「好き嫌いをしない」(51.3%)、「食卓に肘をつかない」(43.0%)、「いただきます、ごちそうさま、と言う」(40.5%)、「口に食べ物を入れたまま話をしない」(36.8%)、「はしを正しく持つ」(35.0%)などが続いています。

また、「食事中に電話やメールをしない」(18.8%)は2割近くに上り、これは携帯電話が子どもにまで普及してきた結果、新たな食事中のマナー問題が生まれていることを示しています。一方、「みんなと一緒に食べ始める」(10.8%)は1割程度で、食事はみんなが揃って食べ始めるという意識は薄れつつあるようです。

また、きょうだいが《いる》子どもや同居家族人数の多い家庭の子どもほど、注意されることが多いという結果が出ています。特に「好き嫌いをしない」(きょうだいがいない31.9%、いる55.5%)、「食卓に肘をつかない」(同 16.7%、48.8%)は、きょうだいの有無で大きな差があります。きょうだいへの注意も、自分に向けられたものと受け取っているのかもしれませんが。

【前回調査との比較】

前回、子どものいる主婦400人に「子育てをする中で、食べ物や食事について、言い聞かせたり守らせようとしたこと」を聞いた時は、「いただきます、ごちそうさま、と言う」(73.3%)が最も高く、以下、「食べ物を粗末にしない」(69.5%)、

「好き嫌いをしない」(67.0%)、「食卓に肘をつかない」(58.8%)などの順で、上位にあげられている項目は子どもと一致しています。また、「皆が食事を終えるまで食卓から立たない」(6.5%)、「皆と一緒に食べ始める」(21.8%)などが低い点も一致しており、子どもだけでなく親の方も既に家族揃って食事をとるという習慣を重視しなくなっているようです。

4. はしを正しく持っている？

「はしを正しく持っている」子どもは 6 割弱

～ はしを正しく持っている子どもほど、食事マナー全般に成熟度が高い傾向～

正しくはしを使うことと食生活への意識は強い相関がある

～ よりよい食生活の環境が、正しいはしの使い方につながる～

家庭や学校での環境や教育と、子どもの食習慣やマナーも関係大

～ 親の食生活への参加やコミュニケーションがマナー習得にもつながる～

「はしを正しく持っている」(58.0%)と答えた子どもは約6割で、「正しく持っていない」(42.0%)は4割強でした。(前問の通り)「はしを正しく持つ」ように言われているのは3人に1人(35.0%)であることを考えると、**はしの持ち方をきちんと教えている親も減少し、教え方も十分ではないと言えるかもしれません。**また、《男子》(49.0%)よりも《女子》(67.0%)の方が、《小学生》(52.0%)よりも《中学生》(64.0%)の方が、きょうだいの《いない》子ども(44.4%)よりも《いる》子ども(61.0%)の方が「正しく持っている」割合は高い傾向が見られます。

はしの持ち方と食生活の意識や実態との関係を見てみると、「正しく持っている」と「持っていない」とで、共通した回答傾向が窺えました。例えば「食事の時に家族と話をする」(「正しく持っている」88.8%、「持っていない」68.5%)、「おかずとご飯を交互に食べる」(同76.7%、同51.8%)、「食べ物を残すのは作ってくれた人に悪い」(同48.7%、同38.1%)、「食べ物、食べ方について何らかの関心を持っている」(同80.6%、同49.4%)など、**はしを正しく持っている子どもの方が、食事中にコミュニケーションをとっており、食べ方のマナーについての意識や、食に対する関心も高い傾向がうかがえます。**見方を変えると、そうした環境にある子どもは、はしの正しい使い方を習得する機会が多いと言えるのかもしれません。

さらに、「はしを正しく持ち、おかずとご飯を交互に食べる」という基本的なマナーと食習慣が身についているか否かは、各質問項目への回答全般にも共通した傾向としてあらわれています。「はしを正しく持ち、おかずとご飯を交互に食べる」子どもは全体の44.5%、「はしを正しく持っていない、食べ方に偏りがある」子どもは20.3%となっています。「身に付いている」子どもは、「身に付いていない」子どもより、「食事の時に家族と話をする」(「身に付いている」91.0%、「身に付いていない」59.3%)、「食事を残すのはもったいない」(同45.5%、同19.8%)、「食の安全に関心がある」(同66.9%、同32.1%)、「学校でお米や野菜を育てたことがある」(同66.3%、同53.1%)など、子ども自身の食に対する意識が高く、実際に食べ物に関わってきた機会や経験も多い傾向が明らかです。いずれにしても、**家庭や学校の環境が、子どもの食習慣やマナーの習得に与える影響は大きい**と言えるでしょう。

5.お父さんは食べ物や食事のことで何かしている？

**料理を作る手伝いや後片づけなどをしているのは3人に2人
父親の食生活への参加は子どもへの影響大**

～父親の参加度の高さは、そのまま子どもの参加度の高さにつながる～

食べ物や食事への父親の関わりについてみると、父親が「何らかのことでしている」のは3人に2人となっています。なかでも、「料理を作る」(33.6%)、「なべやプレート料理(鉄板)の係り」(25.8%)など、何らかの形で食事を作ることが多く、その他では「食品の買い物」(19.7%)、「食事後の食器を運ぶ」(16.4%)などがあげられています。一方、「何もしない父親も3人に1人います。

父親の"食生活参加度"と子どもの回答の関係を見てみると、父親の参加度が高いほど、子どもは食事の際に家族と話しをし、食事が楽しいと感じているようです。さらに、「食」への関心もより高く、はしの持ち方が正しい子どもが多いなど、父親の食生活への参加度が高い子どもは、全般的に食に関連する事項への積極性や成熟度が高い傾向が見受けられ、父親の影響は予想以上に大きいと言えるようです。

食と学校生活

1. 学校給食は好き？ 好きなメニューは何？

学校給食がある子どものうち、55.1%が給食が「好き」

～メニューが豊富で、みんなで食べるとおいしい～

好きなメニューは 1位「カレーライス」、2位「ラーメン」、3位「揚げパン」

～8位に近年の人気メニュー「ピピンバ」も登場～

ほぼ4割(38.0%)の子どもが学校給食は「好き」と回答しました。それに対して、「嫌い」(6.0%)はごくわずかです。さらに、「給食がある」(69.1%)子どもに限ると、「好き」(55.1%)は過半数を超えており、概ね学校給食は好評であると言えるでしょう。

学校給食の評価は様々ですが、「みんなで食べると楽しい」(51.4%)が最も多く、それ以外でも「家で食べないメニューを食べることができる」(42.8%)、「おいしい」(37.0%)、「バラエティに富んでいる」(31.5%)など、家庭とは異なる環境やメニューなどが給食の魅力のようです。

給食メニューの好き嫌いについて自由回答で答えてもらったところ、やはり「好きな料理は「カレーライス」(61件)が断然トップで、次いで「ラーメン」(20件)となりました。以下、「揚げパン」(16件)、「スパゲッティ」(14件)、「鶏の唐揚げ」(12件)など、以前からの子どもに人気のメニューが並んでいます。目新しいところでは、8位に「ピピンバ」(8件)がランクインしています。

2. 給食に地元の食べ物は出てくる？

6割の子どもが「わからない」、ただし「出る」と認識している子どもも3割弱

～中学生になると「わからない」が半分弱に減り、「出る」が4割と増える～

子どもが認識している給食に出てくる地元食材は、「野菜」「にんじん」など

～回答のほとんどが「野菜」～

給食に地元(自分が住んでいる地域)の食べ物や材料が出てくるか聞いたところ、6割の子どもが「わからない」(69.1%)と答えています。認識している子どもの割合は、「出る」(28.6%)、「出ない」(12.3%)で、食材について意識していない子どもが多いようです。

しかし、中学生では「わからない」(41.0%)が半分弱に減り、「出る」(43.6%)、「出ない」(15.4%)が増えていることから、食材についての意識が若干高まり、地域の地産地消が一定程度進んでいることがうかがわれます。

3.学校で「食」について教わったことは？ お米や野菜を育てた経験は？

4割の子どもが「お米の作り方」と「栄養」について学んでいる

～食習慣やマナーについてはあまり教わっていない～

6割以上の子どもが「米」や「野菜」を育てたことがある

～農業体験を通して、楽しさと難しさを実感～

4割強の子どもが、「食」について学校で教わったのは、「お米の作り方」(42.3%)と「栄養」(40.8%)と回答しています。その他では「野菜の作り方」(32.5%)、海外各地の食料不足、飢餓」(25.5%)、「料理の作り方」(25.3%)、「食の安全」(22.0%)などが続き、作り方や「食」を取り巻く問題について教わっていることがうかがえます。一方、食習慣やマナーに関して教わったという回答はわずかです。

また、学校でお米や野菜を育てた経験については、6割強(62.3%)の子どもが「ある」と答えています。育てたことがあるのは「米」(99件)が最も多く、以下、「トマト」(83件)、「キュウリ」(84件)、「ナス」(83件)などさまざまな種類の野菜が続きます。育ててみた感想は、「楽しい」(37.3%)が最も多いものの、「むずかしい」(35.3%)、「たいへん」(32.1%)という感想も多く、農作業の楽しさとたいへんさの両面を感じ取り貴重な体験になっているようです。

農林中央金庫

広報部 広報課：松尾、松崎

〒100-8420 東京都千代田区有楽町1-13-2

DNタワー21(第一・農中ビル)

TEL . 03-5222-2019 / FAX . 03-3213-5276